教員養成系大学における表現系ダンス授業の実践的研究

渡辺　律子*

Practical research in dance class at a Teacher Training university

Ritsuko WATANABE

要旨　デジタル化が進む今日において，大学はICTをはじめとする情報通信システムに対応した教育カリキュラム，授業形態，教材，教授方法に積極的に取り組むことが必要であると考える．本研究では実践授業を通して表現系ダンスの題材「物語―日本昔話―」の教材としての課題を明らかにするとともに，実技授業においてオンライン授業システム（manaba）を併用したので報告をする．「物語―日本昔話―」については，①何を表現するか，②どの場面を切り取るか，③気持や心情を表現するかを十分に話し合わせて記録させることが大切であることが分かり，ワークシートの重要性が示唆された．表現系ダンス授業においてオンライン授業システム（manaba）を用いたところ，授業の振り返りと課題発見などの教育的効果が認められた．

キーワード：表現運動ダンス　題材　授業改善　ICT活用　教員養成課程

はじめに

2020年度は新型コロナウイルスの影響により，小学校から大学まで多くの教育機関において休校，短縮授業，オンライン授業などが実施され，対面での授業に制約がかかった2021年度大学においては新型コロナウイルス感染症予防対策を講じながらの対面授業が優先とされたり，オンライン授業が推奨されたりと授業形態はさまざまである．オンライン授業は大きく分けると，リアルタイムに映像データを配信する「ライブ配信」と予め撮影した動画や授業コンテンツをクラウド上に置いて，学習者がアクセスをすることで学ぶことができる「オンデマンド配信」の２つの種類がある．その他にもオンライン授業と対面授業を同時に行う「ハイフレックス型」，教育目的・効果に合わせて対面授業とオンライン授業を組み合せて行う「ブレンド型」，履修者を少人数に分けて授業実施する「分散型」などがある．いずれにしても大学ではデジタル技術を取り入れたポスト・コロナ時代にも対応すべく教育手法として，対面授業とオンラインを組み合わせたハイブリット授業が今後は推進されるであろうと考える．

文部科学省（2020）が各大学にオンライン授業についてのアンケートを行った結果によると，「実験・実習・実技系科目への対応に問題がある」との報告があり，大学は学びの機会及び質保証を問われている．また，ポスト・コロナ時代に向けても大学は対面授業に相当する効果が得られるオンラインを活用した教育活動の実施が求められる．

以上のことから，大学はICTをはじめとする情報通信システムに対応した教育カリキュラム，授業形態，教材，教授方法に積極的に取り組むことが必要であると考える．

* わたなべ　りつこ　文教大学教育学部学校教育課程体育専修

1　研究の背景

1．1　ICT活用した体育科の授業

文部科学省（2021）のGIGAスクール構想の最新状況報告によると，小中学校における校内通信ネットワーク環境については令和３年度３月末時点では97.9％が使用可能となっている．小学校・中学校・高校では，使用している教科書のQRコードから資料を読み込んだり，デジタル教科書による授業を行ったりと急速なデジタル化が進んでいる．このような学校現場で，体育科及び保健体育科の授業におけるICT機器の活用について，松木，加藤（2019）は，体育授業では問題解決場面でのICTの活用がほとんどであり，具体的な活用としては，「示範（見本）を提示する」「動き（技）のポイントを提示する」「動きをふり返って課題をつくり改善する」活用が多かったと述べている．また，昨年度からのコロナ禍状況下での学びの機会の確保として，教師と学習者の自宅をオンラインによってつないだ同時双方向型の授業（ライブ配信）なども提案されている（体育ICT研究会，2020）.「表現運動系及びダンス」の授業においてICTが用いられる場面としては，練習中のダンスをタブレット等により撮影し，撮影された動画を見てダンスの振りを合わせたり，クラス作品をみんなで鑑賞したりすることに用いることが多い．

なお，「表現運動系およびダンス」の名称については，小学校及び中学校・高等学校学習指導要領では運動領域として「表現運動系」に示されており，具体的な内容については「表現運動（遊び）」,「表現リズム（遊び）」,「フォークダンス」,「ダンス系」,「創作ダンス」など，いくつかの名称が使われているが，本論では「表現系ダンス」「リズム系ダンス」「フォークダンス」で分類（文部科学省，2013）にならい「表現運動系及びダンス」について「表現系ダンス」と称する．

1．2　教員養成課程における表現運動・ダンス科目

村井，木原（2012）は，教師としての資質能力を高めるためには，学習者の自主的な学習を引き出しながら授業を行うことが必要であり，これを小学校教員養成の体育科関連科目にまで拡張することには意義があると述べている．さらに，教員養成課程においては，学生の自主的な学習を引き出す指導には，２つの場合があると考え，１つは学生の「学びたいこと」に対応した内容の指導，もう一つは大学教員の「教えたいこと」を学生が「学びたい」と考えるように指導をしていくことが必要であると述べている．

一方，寺山（2007）によると，小学校における「表現運動系およびダンス」の指導については，苦手意識を持っている教員が多いことが明らかになっている．小学校の現職教員への調査では，「自分に体験がない」「うまく指導ができない」などの理由が挙げられている（安藤 2003）．和光，眞嵜（2018）は，苦手意識を払拭するためには，まず，身体表現に対する「恥ずかしさ」を取り除くことが必要であり，そのうえでダンス教材の開発，実施していくことがダンス授業の質の改善につながると述べている．

1．3　コロナ感染症予防対策を講じた対面体育実技授業

本学では2020年度春学期は全ての科目がオンラインで行なわれ，秋学期は一部の科目の対面授業が認められた．体育関連の実技を行うにあたっては，受講者は１クラス25名程度として，感染症予防対策を取りながら，特に教場及び更衣室での学生同士の密集，密接を避け，ドアや窓を開放し十分な換気を保ちながら実施した．

2020年度の表現系ダンス科目では，学生を２グループに分け，各グループの学生はオンデマンド授業と対面実技を交互に受講する分散型で授業を行った．2021年度は対面実技が認められたが，前年度同様の感染症予防対策を継続して対面実技を行うこととなった．今回はポスト・コロナ期に向けた授業改善の取り組みの一つとして，実践授業を行った．

２．研究課題

本研究の課題は２つある．１つめは教員養成課程における表現系ダンス科目での題材「物語―日本昔話―」についての教材としての課題について検討することである．２つめは対面実技授業においてオンライン授業システム（manaba）を併用した実践授業を行い，授業形態，教材，指導方法の観点から課題を明らかにすることである．研究方法は，授業で用いたワークシートとオンライン授業用システムを活用した動画の活用法および課題レポートを中心に分析し検討を行う．

３．実践授業

３．１　表現系ダンス科目と実践授業の概要

教員養成課程の表現系ダンス科目（全15回）の２回分を用いて実践授業を行った．

科目概要：小学校教諭免許及び中学校・高等学校保健体育科教諭免許取得が可能な１年生対象の科目であり，１回は90分間の授業である．新型コロナ感染予防対策を講じながら，十分な換気と受講者が密接な状況にならない広さの教場において，対面形式で行った．

授業期間：2021年４月～７月．全15回開講．

履 修 者：教員養成課程１年生27名（男子16名，女子11名）．

科目の目的（シラバスより一部要約）：

小学校・中学校の体育における表現運動領域の目標・内容及び指導法を理解し，学習者及び指導者の観点から本科目を受講することで，「ダンス」を理解するための機会となる．･･･身近な題材を選定し，グループで習作を作り発表を行う．

実践授業の概要：表現運動・ダンス科目15回の授業のうち10回目，11回目において実践的授業を行った．題材については小学校体育科第５・６学年表現運動領域の「表現」，および中学校体育分野の「ダンス」領域を想定して設定した．本研究における課題を検討する際の参考とするために，実践授業の「めあて」「目標」は学習指導要領に準拠して考案した．

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編「表現運動系（一部要約）」

表現運動系は自己の心身を解き放して，イメージやリズムの世界に没入してなりきって踊り，互いの良さを生かしあって仲間と交流して踊ったりする楽しさや喜びを味わうことができる運動である．　（中省略）「表現」における技能の「簡単なひとまとまりの動きにして踊る」とは，題材から捉えた動きを基に，表したい感じを中心として動きを誇張したり，変化を付けたりして，メリハリ（緩急・強弱）のある「**ひと流れの動き」にして表現すること**である．「簡単なひとまとまりの動きにして踊る」とは，表したいイメージを変化と起伏のある「**はじめ―なか―おわり」の構成を工夫して表現**することである．（下線・太字は筆者加筆）

３．２　実践授業の実際

実践授業：

「物語―日本昔話―」を題材とした実践授業（45分）を行った（略案参照）．

第10回　表現運動・ダンス　略案

【学習目標】
①物語の世界に浸る.
②場面を変えながら簡単なストーリーをつなげて踊る（表現する）.
③仲間と協力して表現しよう.

	学習活動（学習内容）	指導の要点（指導方法・声掛け）
導入 5 分	1．ダンスウォームアップ ♪あまちゃん体操	・体・心のストレッチ
展開 25 分	**2．表現題材提示** 「物語を表現する」 ―日本昔話― 1）物語を決める 2）一番表現したいところ 【Q.】物語を表現にするには？ 3）絵コンテ，箇条書きなど，表現したい場面を決めてグループで共有する. **3．創作活動** ・今まで授業で行った作品の作り方を用いて作品にする. ・作品は１～１分30秒くらい	・１グループ５～６人のグループを作る. ○話し合い ・知っている日本昔話を10コ書き出そう. ・その中で，表現してみたい昔話を決めよう. 【A.】 今まで授業で行った課題（ホワイトボードに掲示） ①運動の課題 ②イメージの課題 ③はじめ―なか―おわり ＊音楽は使用しない
まとめ 15 分	4．見せ合い 5．授業の振り返り 1）学習カード記入 2）**manabaコンテンツ**で今日の動画を見て，自身の動き，習作の改善点を見つけて，次回の授業で作品を完成させる.	・タブレットで撮影をする. ・発表の仕方（見せ方）の工夫. ・次回ブラッシュアップ.

第11回　表現運動・ダンス　略案

【学習目標】
①物語の世界に浸る.
②場面を変えながら簡単なストーリーをつなげて踊る（表現する）.
③観ている人に感動を与えよう！

	学習活動（学習内容）	指導の要点（指導方法・声掛け）
導入 5 分	1．ダンスウォームアップ ♪あまちゃん体操	・体・心のストレッチ
展開 25 分	（前時の続き） **2．表現題材** 「物語を表現する」 ―日本昔話― 1）動画を見ての感想，意見をグループで話し合う. 【Q.】演劇、寸劇、パントマイムとダンスどう違うの？ 2）切り取る場面、デッサンを考えて，作品のブラッシュアップする **3．創作活動** ・デフォルメをしよう.	○話し合い ・自分の動き，他の人の良かった動き，グループの習作について話し合う. 【A.】 ・演劇に「繰り返し」ってある？ ・皆が動き続ける？ ・「強調したい場面」はどこか.「モチーフ」を考えてみよう. 【デフォルメ】 繰り返し，ユニゾン，メリハリ.
まとめ 15 分	4．見せ合い 5．授業の振り返り 1）学習カードに記入 2）課題：**manabaコンテンツ** 自グループの習作について良いと思った習作についてコメント（レポート）する.	・タブレットで撮影をする.

まず，１グループを５～６人とし，５グループに分けた．各グループで「日本昔話」を10話挙げることを指示し，その中からグループで表現したい「日本昔話」を決めるように伝えた．決定したテーマは「おむすびころりん」「もも太郎」「うらしま太郎」「さるかに合戦」（２グループ）となった．さらに，以下の２点について話し合いをさせた．

・物語で一番表現したいところはどこか
・表現したい場面を「はじめ―なか―終わり」に分けて，箇条書きや絵コンテなどで簡潔にまとめて，ワークシートに記入する．

その後，各グループは15分間で習作を完成させて，本時のまとめにおいて作品を発表し，タブレットで撮影をした．動画はオンライン授業用システム掲載するとともに，以下の学生には課題を出した．

・自分の動き（表現の仕方）について，気が付いたこと．
・表現したいことが見ている人に伝わっているか．

次の時間は，グループでの課題についての話し合いから始まり，すぐに習作のブラッシュアップにとりかかることが出来た．必要に応じて授業中にオンライン授業用システムにアクセスをして動画をタブレットで確認した．

日本昔話　―浦島太郎―

はじめ　―亀をいじめる子どもたち―

おわり①　―玉手箱を開けると煙がモクモク―

なか①　―亀に連れられて海のなか―

おわり②　―おじいさんになったとさ―

なか②　―竜宮城での宴会―

4．考察

4．1　題材「物語―日本昔話―」についての検討

1）グループのワークシートから考察

実践授業では各グループにワークシートを配付し，題材（日本昔話）から表現したい物語の場面を考えてまとめることとした．

本研究の研究課題でもあるため，どの程度の作品構成できるかを確認する目的で，「声かけ」は最小限とし，実践授業中はグループの話し合いについては，意図的にかかわらなかった．

各グループのワークシートをみると，「はじめ―なか―おわり」について，４～８つ表したい場面（ストーリー）が記されていたが，各場面について「どんな感情・・気持ち表現するのか（したいのか）」は記されていなかった．特に「なか」の部分については４つの場面を記しているグループもあった．表現を膨らませたい，または表現したい場面（展開）が４つあったのかもしれない．このグループは何を伝えたいのかわからない作品になってしまい，テーマを変更した．他のグループも実際に動いて作品制作を始めると，ストーリーに流されたり，動きにこだわったりしてしまい，「ひと流れ」や場面の展開がうまく表現できないグループもあった．課題レポートや学習カードに見られるように，観ている側は「何を表現したいのかわからない」，表現している側は「メリハリがない」と感じてしまう結果となったとことが推測される．

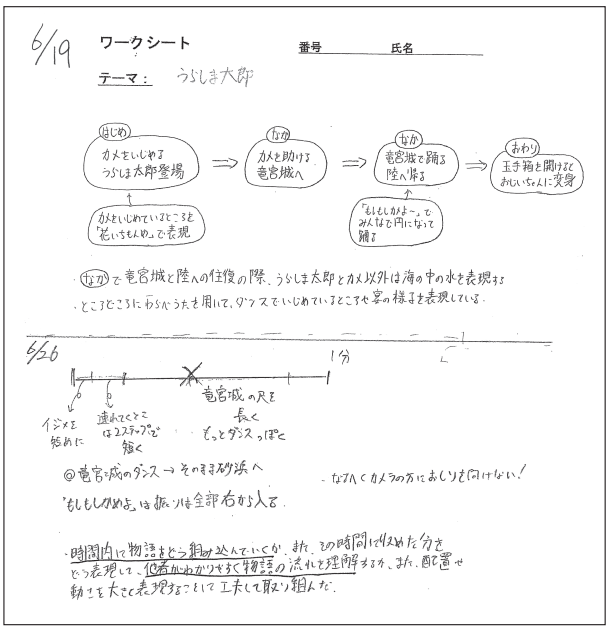
ワークシートには次のような記述があった（筆者要約）

○「おむすびころりん」グループ

・「はじめ―なか―おわり」をまとめ直した．余分なところを削ったので，すっきりして，テンポが良くなった．歓迎のダンス（ネズミがおじいさんをもてなす場面）でフォーメーションを組んで踊るようにした．

○「ももたろう」グループ

誰もが知っている作品だが，表現をすると各シーンが長くなり，場面間も間延びしてしまった．



○「うらしま太郎」グループ（ワークシート参照）

（動画を見て）時間内に他者が理解できるように物語を表現するにはどうするか．

○「はなさかじいさん」グループ

躍動感を出したいとなったので，移動は全てステップにする．個人が前回より大きく，メリハリをつけて動く．前回のセリフは擬音語で表現する

○「一休さん」（１回目のテーマ「さるかに合戦」から変更）

物語を全部表現しようとしたために，何を表現しているかが分からなかったので，テーマを変更した．１回目の反省で場面の切り替えを意識した．

「日本昔話」については，聞けば絵が思い浮かぶ話ばかりではあるが，作品（ひとまとまりで表す）では，①何を表現するか，②（そのためには）どの場面を切り取るか，③（その場面で）どんな気持や心情を表現するかを十分に話し合わせて，記録させることが大切であることが分かった．

授業者は，話し合ったこと，表したい場面をワークシートなどに記録させることを明確に学生に伝える必要があることが分かった．表現運動の授業におけるワークシートは，工程表，話し合いの記

録にとどまらず，イメージや発想を膨らませる助けにもなり，思考の道しるべにもなり，思考が迷子になると元の場所に戻る助けもしてくれる．また，イメージの風船が膨らみ，舞い上がってどこかに行ってしまわないように，括り付ける木の枝のような役割であるといってもよいかもしれない．ワークシートは，学習のめあてを達成するための重要な教材に匹敵することが分かった．

２）課題レポートから考察

２回の実践授業のまとめとして課題レポートを作成させた．

課題

①自分のグループの１回目と２回目の作品を比較して講評をしてください．

②一番良かったと思うグループの講評をしてください．

課題レポートについて技能面と作品構成について分けて検討を行う．まず，課題①については学生の多くが１回目の発表は「（グループの中で，または他のグループと比較して）大きく動いているつもりであったが，動きが小さい」「メリハリがない」「ピタっと止まれていない」と述べていた．本科目では毎回の授業でダンスの技能要素である「メリハリ」「体全体を使って動こう」と伝えており，動画を見ることによって学生が視覚的・客観的にこの点について指摘できる事は学生の学習成果が表れているといえる．

作品構成については「誰でも知っている話（もも太郎）なのに，いざダンスにしようとすると難しかった」，「演劇のような作品であった」，「ストーリーに忠実に表現したら長くなってしまった」「何を表現しているか分かるように物語のすべてを表現しようとしてグダグダになってしまい，逆にわからなくなってしまった」

など，表現ダンス系の作品にするためには，どうしたらよいか，という知識が不足していたことが分かった．

２回目実践授業でブラッシュアップした作品については，技能面では「ツーステップを入れた」，「ユニゾンとフォーメーション変化をいれた」，「リズム感を入れた」など，どのグループも作品の改善と工夫が述べられていた．一方，「ダンス要素が入ってきたので，動きを覚えるのが必至で，メリハリを意識するどころではなかった」との意見もあった．

作品構成については「表現したいところを絞ったら気持ちが伝わった」という意見が多数述べられていた．表現することを絞ったことにより，「動き」が明確になり，ユニゾンを用いたり，「円形で踊りながら喜びを表現しよう」と隊形にも気を使ったりすることが出来たようだ．そして，課題②「一番良かったと思うグループの講評」では，見る側の立場から，「側転が斬新だった（「もも太郎」）について」，「お地蔵さんが動いているのが面白（「一休さん」について）」，「桜の花が満開になったところの表現が大きくてダイナミックで素晴らしかった」「花びらが舞うだけでなく桜の木も踊り躍動感があった」（「はなさかじいさん」について），など自分たちの作品には入っていない多様な動きや表現方法，発想などを見つけていた．

また，感想として「表現している人がノリノリで楽しそうだったので，観ている側も思わずにやけてしまった」，「自分たちにはないダイナミックな動きとメリハリでとても良い作品だった」，「声や言葉がなくても体だけで表現できることが分かった」など，動画を丁寧に見返すことにより，学習者は授業のめあてや目的の理解ができたことが分かった．

以上のことから，学生は対面実技の授業からの学びに加えてオンライン授業システムの動画を確認することで，課題の振り返りを行うとともに，多様な動きの発見，表現をする楽しさ，他の人の表現を見て一緒に分かち合える気持ちなど，主体的に深い学びを行ったことが分かった．

また，オンライン授業システムを用いて動画による課題の振り返りをすることは，学習者の技能確認，作品つくりに役立つことはもちろんである

が，今期あの課題レポートから，作品を評価する視点を育成することにつながることが推測された．教員養成課程の学生にとっては，ある程度のダンスの技能を獲得することや，表現・ダンス作品を制作する経験も大切だが，ダンス作品を適切に評価する力を養うことも大切であると考える．今後は，「作品の評価法について」の教材化に向けて研究を行い，教員養成課程の表現ダンス科目に取り入れたいと考える．

３）オンライン授業システムの活用についての考察

実践授業では，２つの場面でICT及びオンライン授業システムを活用した．１つめは授業のまとめの発表時にタブレットを用いて作品を撮影し，オンライン授業システムを用いて，学習の振り返りと次回授業の課題を発見する場面であった．

前回授業の復習として動画を確認させて，そこから各自に課題発見させて次の授業に参加させると学生の学習意欲が高まっていると，授業者（筆者）は感じた．学生は「動きが小さくて表現したいことが分からなかったね」，「あれ，変えたほうがいいよね」など，共通の課題からグループでの対話が始まり，アクティブラーニング（自らが主体的に学ぶこと）につながった．また，個人的に技能の修正をしたり，練習を行ったりもしたようだ（課題レポート記載から）．

２つめは，実践授業「物語―日本昔話―」の単元のまとめとして，オンライン授業システムによる動画の閲覧を通して課題レポートを作成する場面であった．

オンライン授業システムを活用することによって，4. 2）で考察したように，学生はじっくりと課題に向き合い，本科目において学んだ，学校体育における表現・ダンスに必要な「メリハリ」「全身を使って表現をする」，「多様な動きを考えて表現する楽しさ」，などを確認できたと考える．また，１回目の実践授業を欠席した学生は，オンライン授業システムの動画を確認することにより，「１回目の学習過程には参加できなかったものの，次回の授業への参加の不安感が減った」と課題レポートに記載があった．表現運動・ダンス科目は協同で作品を作ることが多く，欠席した学生は少なからず不安感を持って次の授業に参加することになるが，オンラインを活用することで安心して授業に参加できることが分かった．このことから，通常の授業においても，適宜授業動画や授業まとめをオンライン上にアップすることは，学生の学びの機会及び授業の質保証につながることが分かった．

５．成果と今後の課題

本研究の課題は２つであった．１つ目は教員養成課程の表現系ダンス科目における「物語―日本昔話―」の教材として課題を明らかにすることであり，以下の点が分かった．

１）「日本昔話」はストーリーが絵として浮かぶため興味を引く題材であった．

２）「物語―日本昔話―」のテーマ（話）を決める際には，①何を表現するか，②（そのためには）どの場面を切り取るか，③（その場面での登場人物などの）どんな気持や心情を表現するかを十分に話し合わせて，記録させることが大切であることが分かった．

３）「ひと流れ（はじめ―なか―おわり）」を考えるときには，場面の心情や雰囲気を言葉で明記させると，動きや表現方法を創出しやすいことが分かった．

また，実践授業を通して，ワークシートの教材として重要性が示唆された．

今回の実践授業を通して学生は，幼児のころから慣れ親しんだ物語ではあるが，それを身体を使って表現をする難しさと，面白さを学んだ．今回は大学生を対象に授業を行ったが，小学校・中学校・高校別（発達別）での教材としての研究も行う必要性があると考える．

２つ目は，オンライン授業システムを併用した実践的授業を行い，授業形態，教材，指導方法の観点から検討を行うことであり，以下のことが分かった．

4）表現ダンス系の実技授業においては，オンライン授業システムによる毎回の動画視聴は授業の振り返り及び次回授業での課題を見つけるアクティブラーニングにつながることが分かった.

5）表現ダンス系の実技授業においては，授業者にとっては単元まとめや学期末課題として，オンライン授業システムを活用することで課題の幅が広がり，学習者にとっては作品動画等を視聴することで，技能面における復習とともに表現ダンスに関する理論的な構築を試みるなど，学びが深まることが分かった.

今回は，実践授業でのオンライン授業システムの活用については，動画による作品及び自身の動きの確認など，学びの振り返りとしての活用となったが，今後はオンラインによって教育的効果が認められる教材，教授方法についての研究を行い，デジタル社会に対応した授業改善に取り組みたいと考える.

参考文献

体育ICT研究会「同時双方向型の遠隔体育の授業実践」，https://ict-enews.net/zoomin/27suzuki/（参照2021.10.10）

寺山由美（2007）「表現運動」を指導する際の困難さについて ―千葉県小学校教員の調査から―，千葉大学教育学部研究紀要，55，179-185.

松木友和・加藤謙一（2019）体育科及び保健体育科授業におけるICT機器の 効果的な利活用に関する基礎研究 ―文献調査をもとに―， 宇都宮大学教育学部教育実践紀要，6，189-196.

村井潤，木原成一郎（2012）小学校教員養成における体育科関連科目の 授業改善に関する事例研究 ―学生の「学びたいこと」に着目して. 体育科教育学研究 28(1)，11-28.

文部科学省（2010）「教育の情報化に関する手引き」

文部科学省（2013）学校体育実技指導資料第９集 表現運動系及びダンス指導の手引き，4-8.

文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編.

文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編.

文部科学省（2021）GIGAスクール構想の最新の状況について，https://www.mext.go.jp/kaigisiryo/content/20210319-mxt_syoto01-000013552_02.pdf（参照2021.10.10）

文部科学省（2020）コロナ対応の現状，課題，今後の方向性について，資料2-1. https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf（参照2021.10.10）

文部科学省（2020）大学等における遠隔授業の取扱いについて（周知），https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/mext_00027.html（参照2021.10.10）

文部科学省（2020）高等教育機関におけるICT活用教育，https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/chosakuken/hoki/h27_02/pdf/shiryo3.pdf（参照2021.10.10）

文部科学省（2020）文部科学省におけるデジタル化推進プラン（案），https://www.mext.go.jp/kaigisiryo/content/000089227.pdf（参照2021.10.10）

和光理奈，眞嵜雅子（2018），小・中学校教員のダンス授業と苦手意識の考察，中京大学体育研究所紀要，32，13-18.